



杜づくり 本多静六と宮脇昭



絵画館銀杏並木

神宮球場や秩父宮ラグビー場、銀杏並木で知られる神宮外苑の再開発が話題になっています。1,000 本以上の樹木伐採と超高層ビルの建設計画に対して、坂本龍一や村上春樹、桑田佳祐・平尾剛・ちばてつや（敬称略）などの著名人が反対の意を示し、反対署名は 21 万筆を超えているそうです。さらに、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の諮問機関、国際 NGO イコモス（国際記念物遺跡会議）は、この再開発は「文化遺産の不可逆的な破壊だ」と述べ、撤回を求めました。

また、NHK 朝ドラ『らんまん』では、明治末期に行われた『神社合祀（ごうし）令』に因る神社破壊と『鎮守の森』伐採が話題になっています。明治末期、全国に 20 万社あった神社が、数年で 7 万社取り壊され、多くの天然記念物や土着の習俗が失われたと言われます。

今回は、明治神宮の杜づくりに貢献した本多静六氏と鎮守の森づくりを提唱し世界でその実践が進められている宮脇昭氏を紹介します。

本多静六氏（1866：慶応 2 ～ 1952：昭和 27 年）は、現在の久喜市菖蒲（しょうぶ）町に生まれた埼玉県の偉人です。日本初の林学博士であり、「日本の公園の父」とも呼ばれます。東京の日比谷公園や明治神宮、北海道の大沼公園、奈良公園、福岡県の大濠公園、埼玉県では大宮公園や羊山公園など、全国の著名な公園を設計しました。武蔵嵐山の名付け親でもあります。明治神宮の鎮守の森「内苑」は、1921（大正 10）年、全国から 365 種約 12 万本が献木され、計画的に植えられました。「森林は成長進化」という植生遷移が構想され、100 年後には広葉樹を中心とした極相林（植物群落が遷移によってしだいに変化し、その地域の環境条件に合った長期間安定な状態が続くこと）に到達するという壮大な構想でした。100 年後の今、東京都心に貴重な動植物や昆虫が生息する原生林が存在します。神宮外苑は、青山練兵場跡地に、国民に開かれた「洋風」の緑地公園として、広く国民より募った寄付と全国青年団の勤労奉仕によって造られました。静六の生地、のどかな田園の広がる旧菖蒲町庁舎 5 階には、本多静六記念館があります。入館料は無料です。



本多静六

宮脇昭氏（1928：昭和 3 ～ 2021：令和 3 年）は、世界的に有名な生態学者です。鎮守の森などに残っている樹木種の調査などから、人間の手が入らない、土地固有の植生がもっともその土地に適性を持っており、生命力も強い、「潜在自然植生」という理論を実践し、国内外 13 カ国で植林を指導し、植えた本数から「4 千万本の男」と呼ばれています。今から 20 年程前（埼玉国体が開催された頃）、熊谷ラグビー場西グラウンドの植林ボランティアに参加しました。地域本来の樹木を混植・密植すれば、樹木は競合・共生し合い、10 年後には立派な杜になると語っていた指導者は、今思えば、宮脇氏でした。2 年前に他界しましたが、「宮脇方式」の植林は世界中で実践され、熱帯林の再生、砂漠の緑化、ミニ森林、防災林づくり等、地球環境保護に貢献しています。



宮脇昭

二人とも、自然に学び、自然の力を生かし、かけがえのない遺産を次世代に残しました。これらの遺産を次の世代にどう繋げていくか、今を生きる私達のつとめです。

里山の9月の活動は、9月10日（日）に行われました。6月・7月・8月が休会で、伸びた里山や遊歩道の下草（笹）刈りを行いました。台風一過の真夏日でした。自治会の皆様、立正大学関係者、中学校関係者、個人ボランティアなど 20 名程の参加者が、たっぷり汗を流しました。お疲れ様でした。裏面に原新田集会所夏祭りの記事を載せてあります。



写真担当



鎌で除草



刈り払い機で除草